

2017 年度

フランス語海外フィールドワーク奨学金

報告書

LGBT の老後をフランスから学ぶ

～パリで暮らす LGBT 該当者をモデルに日本の LGBT の未来を考察する～

慶應義塾大学 環境情報学部 3 年

高島秀二郎

## 〈目次〉

はじめに-----	p.3
1章 研究概要-----	p.4
2章 研究背景-----	p.4
3章 研究意義-----	p.5
4章 フィールドワーク活動内容-----	p.6
5章 考察-----	p.14
6章 おわりに-----	p.16
Résumé-----	p.17

## はじめに

今回は、2018年度フランス語海外フィールドワーク奨学金をいただき、個人研究を行う機会を頂戴しました。私はSFCにおいて日本のLGBT社会について学習し、実際に日本のLGBTの方々、またLGBTフレンドリーである企業へのインタビューなどの活動を行ってきました。この度は、LGBT先進国であるフランスで調査をする機会を得て、LGBTと関わる様々な現場に行き、パリに住むLGBTの方々の現状に触れることができました。それは私にとって大変貴重な経験であり、私の研究の視野を大きく広げるきっかけにもなりました。今回のフィールドワークでは、パリにあるCentre LGBT Paris-ÎdFの従業員の方、パリで活動するGrey PRIDEのメンバーの方々、パリにある老人ホームの従業員の方々に直接会って話を伺いました。その報告を以下にさせていただきます。

## 1 章 研究概要

本研究は、LGBT について生じる数多くの社会的問題のうち、特に老後社会と LGBT の関係に焦点を置き、LGBT の老後生活をより良いものにするためには如何にして社会を作るべきかということを考察するものである。同性愛者に対する高齢者介護問題や、子孫を持たない同性愛者の孤独死問題など、考えられる問題は複雑であり、問題全体として相互に関わっている分野の範囲が広い。したがって、当問題を理解するためには多面的に見る必要があり、LGBT 該当者や LGBT の介護者など、様々な経歴の方々にインタビューを実施することにした。

## 2 章 研究背景

近年の日本では、同性婚や HIV、思春期問題など LGBT に関しての研究は多くなされており、新聞やニュースなどでもパートナーシップ法の制定などが大きく取り上げられるほど、日本において LGBT は注目されている。しかし、LGBT の高齢者や老後の問題に関わる先行研究はほぼ無いに等しい。その理由として、ゲイムーブメントが始まったのが 1990 年代からだということが考えられる。ゲイムーブメントとは、1990 年代はじめに女性誌を中心に同性愛者の様々な情報が流通し、それを発端として LGBT のための NPO が設立されたり全国各地に同性愛者サークルが生まれたりするなど、現在のゲイ文化の始まりとなる社会現象のことである。それまでの同性愛者は同性愛に対し否定的な考えを持ち、異性と結婚し家族を営むことが正しいと考えてきたが、90 代当時の若い同性愛者は自分たちの性的志向を肯定的に考え始めるようになり、生涯を通じて同性愛者として生きるようになった。1960 年代生まれの彼らのほとんどは、現在だと 60 歳前後であり、丁度高齢に差し掛かる直前にいる。つまり同性愛者として生きる人々がこれから直面する問題が LGBT における高齢社会問題であり、彼らが一刻も早くライフスタイルの確立できることが必要なのである。

同性愛者は、親にその事実を隠し続けたり、カミングアウトして距離を置かれたり、理由は人それぞれにせよ親と疎遠になりがちである。また、子供に関して

も現在の日本では同性カップルの養子を持つ環境は未だほぼないに等しい。したがって、家族からの支援を受けにくい同性愛者は、経済的支援が受けられないために貧困問題に直面したり、支援者がいないために孤独死問題・介護問題と直面したりするリスクがとても高い。後者 2 つに関しては、老人ホームなどの介護施設に入るという解決策も考えられるが、介護現場にも問題は多い。例えば、自分が同性愛者だということを隠し続けて住む精神的負担があったり、心と身体の性別が異なる場合、介護側の理解がないと却って身体的にダメージを与えてしまったり、精神的な負担になったりと介護現場にもそういったリスクがある。しかし今のところ日本には、LGBT のためのカウンセリングを設置したり、LGBT のための身体的介護を行ったりする老人ホームは見当たらない。

ちなみに、2015 年に電通ダイバーシティラボが日本全国 69,989 名を対象にして行なった「LGBT 調査 2015」の発表によると、調査対象者の 7.6 パーセントが LGBT 層に該当するという。つまり、12、13 人に 1 人は LGBT 該当者に当たることになる。それぞれの生き方があるため全員とは言えないものの、日本人の 12 人、13 人に 1 人が今、これから直面する問題として重要視すべきなのである。

上記のことを踏まえ、これからの LGBT 老後社会はどうあるべきなのか、LGBT 先進国であるフランスの LGBT の老後生活に触れることでその答えを探ることができるのではないかと、私はそう考えた。現にフランスでは、同性愛者のための老人ホーム建設が進められていたり、シニア世代の同性愛者が交流するイベントを行ったり、日本にはまだない取り組みが盛んに行われている。それらを調査するため、今回のフランス語フィールドワークを実施した。

### 3 章 研究意義

本研究では、LGBT に該当する高齢者の方々、彼らをサポートする側の方々、介護する側の方々のインタビューを通じて、LGBT 高齢者のためのより良い社会とはどういったものなのかという点を明らかにする。そしてその結果から、LGBT も含めて平等に生きやすい老後社会を考察することまでを目標とする。

## 4章 フィールドワーク活動内容

### 活動概要

今回、2018年2月20日から3月20日の1ヶ月間パリに滞在しフィールドワークを行った。今回インタビューをしたのは以下の方々である。

- 1 Centre LGBT Paris-ÎdF の従業員の方
- 2 Grey PRIDE の会員の方々
- 3 パリの主要な老人ホームの介護士の方々

まず、パリの中心地マレ地区にある LGBT のための情報センター、そして Centre LGBT Paris-ÎdF に行き情報を得た。その中で連絡先をいただいたシニア LGBT の方々に直接会い、インタビューを行った。老人ホームはパリ内に点在しているため、インタビューを行うにあたっては各老人ホームの近くを訪れたときに寄り、インタビュー交渉をするという形で進めていった。以下、それらの内容を書き記していく。なお本文書では、個人情報を扱う内容のためインタビュー本人の顔写真は伏せ、代わりにイラストで置き換えている。

### 1. Centre LGBT Paris-ÎdF について



Centre LGBT Paris-ÎdF はパリのゲイタウンであるマレ地区に位置する。2008年に様々な組織、各個人からの支援によって設立された Centre LGBT Paris-ÎdF は、設立後毎年 17,000 人以上の訪問客を受け入れている。活動内容としては、老若男女問わずゲイやトランスジェンダーの方々などが抱える LGBT 問題をサポートすることに加え、テーマ別の LGBT 討論会（テーマは「同性婚」や「LGBT の労働差別」など）や、ゲイアーティストによる作品展覧会、LGBT 関連の書籍紹介会などがあり、彼らの活動は幅広い。



上図は Centre LGBT Paris-ÎdF 内風景である。LGBT の尊厳や社会運動を象徴する虹色をイメージしたようなカラフルな椅子、壁が使用されており、明るい印象を受けた。右側に見える棚や柵には LGBT のための様々なパンフレットが並べられていた。その量や種類は非常に多く、一見しただけでも 50 種類近くのパンフレットが並べられていることがわかった。例えば、HIV/AIDS の予防、治療に関する専門家など医療関係の案内、同性カップルが生き生きと暮らすためのノウハウが簡単にまとめられた案内などのパンフレットだ。パンフレットコーナーには丁寧にタグ付けがされており、「GAY (ゲイ)」・「LESBIENNES (レズビアン)」・「BI (バイセクシャル)」・「TRANS (トランスジェンダ

一)」という分類は勿論、「JEUNES (若者)」「SENIORS (高齢者)」というように年齢別にまで分けられていた。このことから Centre LGBT Paris-ÎdF の対応の幅広さが感じられる。

Centre LGBT Paris-ÎdF の営業時間は、月曜日から金曜日が 15 時 30 分から 20 時、土曜日が定休日、日曜日が 13 時から 19 時である。私が訪れた時は営業開始すぐであったが、既に従業員は 7 人おり、その内訳は男女老若様々だった。その中で、今回聞き込みを行ない、インタビューを受けてくれた方がこの人物である。



彼は LGBT についての知識を豊富に持ち、特にシニアの LGBT のサポートを行なっている。インタビューを進めるにつれ、LGBT 問題への向き合い方のヒントを得ることができた。その内容を書き記していく。

まず、Centre LGBT Paris-ÎdF は様々なプロフィールを持つ人たちに対応できるための取り組みに力を入れている。先ほど述べたように、従業員は男女老若さまざまであり、出身もヨーロッパからアジアまで幅広く、言語的にも非常に幅広く対応できる。また、Centre LGBT Paris-ÎdF では、ゲイフレンドリーなレストラン、クラブの位置をまとめた「ゲイタウンマップ」というものを配布しており、それら自体も様々な言語に対応していた。それはアジアの中でも「中国人用」「韓国人用」などに分けられているほど細かい分類がされており、それぞれの国

の言語で書かれたバージョンのマップも用意されていた。日本人用はなかったものの、「日本人のためのゲイフレンドリーなレストランは？」と尋ねるとすぐにゲイフレンドリーの寿司屋、うどん屋をマップに書き記してくれるほど、従業員の対応力は高かった。

そして次に、世界情勢の調査にも力を入れていることがわかった。パリにおける LGBT 問題だけでなく、カリフォルニアや北京、シドニーなど世界中のゲイタウンの LGBT 問題を調査するために、実際に現地に出向いてそこに住むゲイやレズビアンとの交流を深めているという。2018 年夏には、日本最大のゲイタウンである新宿 2 丁目を訪れる計画があるそうだ。インターネットでの情報だけでなく現地に住む LGBT の生の意見を聞くことで、自分の国との違いをより具体的、客観的に分析することができ、LGBT センターのサポートの向上に繋げることができると話していた。

また、彼らは討論会やイベントを 3 日に 1 回ほどのペースで行なっている。LGBT センターの従業員もそれらに積極的に参加することで、LGBT におけるタイムリーなニーズを知ることができ、そこで得たニーズ情報がまたサポートの向上につながるため、LGBT センター側としても有意義なものとなる。また、イベントや討論会を開催するもう 1 つの目的として、参加者同士の交流を促進させるといふことがある。同じ問題を抱えるマイノリティの人々が交流する機会を得ることは非常に重要で、特にシニア世代の場合、LGBT 界限での討論会、討論会後のお茶会や美術館巡りなどを楽しみに待つ参加者も多いという話もあった。

## 2. Grey PRIDE について



Grey PRIDE は、シニア世代における LGBT 問題についての討論会や、シニア世代の LGBT が集まり交流を持つための食事などを開催したり、グループメンバーでの Web サイト運営、ブログによる情報、意見発信などを行っているグループである。所属メンバーは 2018 年 7 月時点で 420 名制度。今回、Centre LGBT Paris-ÎdF の従業員の方に Grey PRIDE の連絡先を教えてもらった。Grey PRIDE とコンタクトを取ったところ、近日中に Grey PRIDE のメンバー 3 人でランチをする予定があることを聞いたため、そのランチに参加させてもらい、インタビューを行なった。



上図は今回、インタビューを受けてくださった 3 人の方々のイラスト写真である。

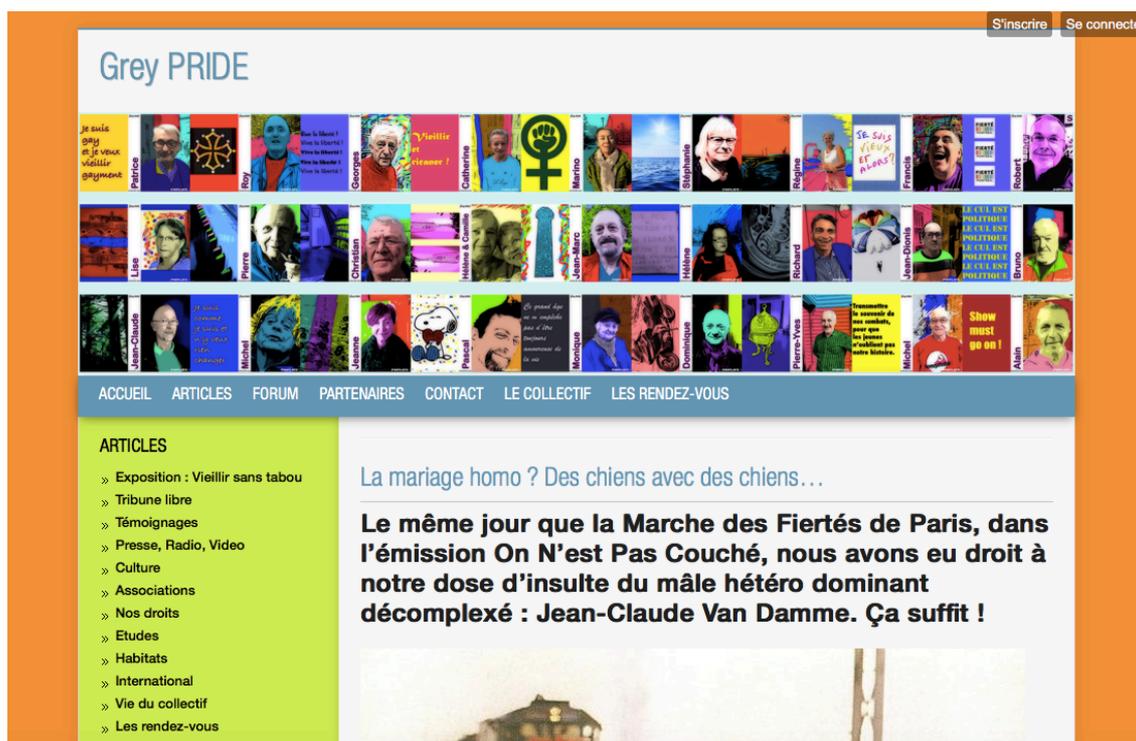
まず、Grey PRIDE は 1 ヶ月に 3 回ほど LGBT Paris-ÎdF での集まりを行なっている。Centre LGBT Paris-ÎdF の従業員と同様に、シニア LGBT 同士での討論によって意見を共有できること、シニア LGBT 同士で交流することは非常にいい機会だという。どうしても年を取ってしまうと、わざわざ外出する気力を失ってしまったり、人との交流を持つ機会を得ることが難しかったりするが、定期的にそういったイベントが行なわれることでそういった問題を解消することができるという意見も出た。食事会に関しては、特に LGBT Paris-ÎdF のように定期的に行なわれているわけではなく、メンバーが自主的に公式サイトで呼びかけて開催されている。

今では LGBT 先進国であるフランスでも、数十年前の未だ LGBT への理解が浸透していなかった時代は差別が酷く、彼ら自身も差別を受けたと言う話も

伺った。その内容は、ゲイとわかった途端に集団から暴力を受けたり、日々罵声を浴びる生活を送っていたりという、不条理を痛感するような内容ばかりだ。当時の差別について話し始めるとその事例は絶えず挙がり、当時に受けた差別の多さを物語っていた。そして被害者から直接聞くリアルな体験談から、当時の差別に立ち向かう覚悟、多大な苦勞が非常に生々しく感じられた。

それでも、3人それぞれに「今、幸せですか？」と聞くと、3人とも「Oui (はい)」とすぐに明るい返事が返ってきた。彼らは全員夫と共に住み、養子を持ち、孫もいるのだそう。数年前に前夫を失くした方もいたが、今は新しい夫と住んでいて、彼ら同士はシニア LGBT におけるイベントで出会ったと言っていた。家族を持ち、子育てを行い、シニア世代で再結婚をしたりするといったことは、日本では未だ聞いたことのない事例であったため、私にとって衝撃であった。

日本の LGBT 社会についてどう思うかという質問に対しては、日本の現状をよく知らないため答えられないとのことだった。



後日、先ほどのインタビューを通じて情報を得た Grey PRIDE サイトを閲覧した。このサイトはシニア LGBT に関しての内容が非常に充実していた。特にメンバーの方々が日々投稿するブログ「ARTICLES」では、「Où (bien) vieillir

quand on est gay? (ゲイはどこで年をとるべきか?)」や「L'âgisme, une discrimination longtemps niée (長いこと認知されてこなかった年齢差別)」などの社会問題提起文から、「90歳で自分のセクシャリティを隠し続けた男の人生を振り返る」といった伝記文のようなものまで、それらの内容に縛りはなく、投稿するメンバーが非常に自由にブログを投稿している様子が伺えた。他にも、「FORUM」では、決められたテーマについてネット上で話しあう「ネット討論会」が行われている。これは非常にオープンな内容で、メールアドレスを登録すれば実際に私でも意見を送ることができるような仕組みになっている。

### 3.パリの老人ホーム



パリの老人ホームを巡りインタビューするにあたって、訪問数は10件を超えた。この訪問数の多さでは効率化を測る必要があると考え、あらかじめiPadに質問を用意した上、そこに回答を書き込んでもらいながら、随時口頭でのインタビューをするという形にした。しかし、10箇所以上の訪問をしたものの、急に訪れた日本人学生（実際には全てメールを送ったものの、すべて返ってなかった）に住居者の情報を伝えることに対して好印象は持たれず、結局インタビューに応じてくれた老人ホームは4件であった。その4件のインタビュー内容をまとめた内容を以下に書き記す。

まず、今回取材した老人ホームを運営している4つの会社はかなりの大手で、パリだけでもそれぞれ10件近くの前系列の老人ホームを展開している。その4会社全てが「入居希望者がLGBT該当者だったとしても、特に拒否は行っていない」と答えた。しかも、男性が「女性として住みたい」、反対に女性が「男性として住みたい」と希望を出すと、その希望通りの性別で住むことができるということで、トランスジェンダーの方々に対する対応も感じられた。

意外であったのが、自分のセクシャリティをオープンにする印象を持たれがちなかもしれないフランス人であっても、高齢になるにつれてそれを公言する人

は少なくなっていくという話だ。その理由は決して言いたくないからではなく、わざわざ言う必要がないからだという。例えばフランスであっても、現在のシニア層の中には LGBT に対する偏見を持つ人々が残っており、老人ホームにおいて自分のセクシャリティをオープンにする必要性と、LGBT の偏見を受けると、言わない行動を取るのだそうだ。

上記のように、LGBT であることを隠す人々がいることが関係するのか、未だに LGBT 関連での問題は特になくはないという回答があった。私は、LGBT 先進国ではゲイやトランスジェンダーの方々のため特有のカウンセリング方法や介護方法がある程度存在し、介護士は異性愛者のための特別なカウンセリングや、通常の介護とは違った訓練を受けているだろうという考えのもとインタビューを行ったが、実際に話を聞いてみると、そういうことではないとわかった。介護士の考えとしては、老人ホームには LGBT だけではなく様々な病気、事情を持った住居者が多く存在するため、特に LGBT に限って特化した知識を持つことはない。ただ、同性愛者のための老人ホームや、同性愛者を専門とした介護がいることで、より安心する人々がいることも事実だという。

## 5章 考察

以上をフィールドワークの内容の報告とし、それらをまとめ、日本の老後 LGBT 社会について考察する。

インタビューを終えて感じたことは、マイノリティ側に属する人々の集まる機会を設ける重要性である。LGBT は、一見するだけでは該当者であるかどうかを見極めるのがほぼ不可能であり、さらに高齢になればなるほど家に籠りがちになる。そのためシニア層の LGBT 同士が交流を持つ機会は少なくなり、彼らは孤独を感じるようになる。そのような状況の中、展覧会や討論会など、場の種類は問わず、彼らが交流を持つ機会が定期的にあることで、そこに形成されたコミュニティへの所属感が彼らに安心感を与えることができる。それに加え、シニア LGBT のためのコミュニティは、彼ら同士の中で趣味や娯楽の面をポジティブに変化させ、残りの人生の生きがいにつながっていることがわかった。

そして、マイノリティのための場所作りとして LGBT センター（今回の調査では Centre LGBT Paris-ÎdF）の存在がとても大きいことも感じられた。上記の通り、老若男女、人種を問わない対応範囲の広さ、HIV/AIDS 問題や社会保障問題など高い専門力を必要とする相談事ができる反面、アート展覧会などのエンターテインメントを手軽に楽しむことができる場でもある。そのような活動の幅広さが、LGBT マイノリティに何時でも訪れる事のできる場作りに繋がっているのだろう。

シニア LGBT の介護現場に関しては、インタビューを行なう前に抱いていた期待を良い意味で裏切られた。LGBT 問題は視覚的に認知できないため解決が難しく、現場では何かしらの問題が生じているのかもしれないと思っていた。しかし今回のインタビュー先では未だ事件があったことがないということを知り、「LGBT のための介護の必要性」について改めて考えさせられるきっかけになった。確かに、周りが LGBT 該当者を受け入れることで、彼らの感じがちな孤立感、疎外感はなくなり、生き辛さを感じないのかもしれない。そう考えると、身体的なケアよりも精神的なケアの方が重要なかもしれない。

これらのことを考えると、まず日本に必要なのは幅広い対応力を持った LGBT センターの設立だと私は考える。実際、現在の日本に LGBT センター各地に設置されてはいるが、日本最大のゲイタウンである新宿 2 丁目であっても、

そこに存在する LGBT センターは少しゲイ専門のような印象を受ける。様々なイベントや相談窓口を設けてはいるものの、レズビアンのための案内はあまり見当たらず、今回のテーマであるシニア世代に向けた案内も見当たらなかった。これでは、ゲイやトランスジェンダー以外にとって LGBT センターを訪れる敷居は高いままで、交流の場になりにくい。既存の LGBT センターのサポートの質を向上させるためには、性別、年齢など幅広い LGBT 該当者に足を運んでもらい、生の意見をもらうことが重要だろう。

LGBT の老人ホーム対応については、介護側の理解力促進が必要となる。パリの老人ホームでは、介護側が LGBT の住居者を良い意味で「気にしていない」様子が感じられた。LGBT のための具体的な介護方法を考えることではなく、介護側が LGBT を迎え入れるための心構えを持つことが大切ではないかと私は考えた。介護側には始めに、LGBT をオープンにする高齢者がこれから増えていくことを理解してもらい、間違った受け答えをしないための知識、考えを持ってもらうことが必要となる。

以上が、私の考察である。

## 6章 おわりに

最後に少し私自身の現地での生活について振り返る。このフィールドワークでは、いかに自分が世界を知らずに甘えた存在であったかと痛感させられた。文化の異なる土地での1人フィールドワークは、全くと言っていいほど思い通りに進まず、何度も引き籠りたい思いにさせられた。しかし日本に帰ってきて数ヶ月経った今、特に何もなくて淡々と過ぎる日本での生活と比べると、あれほどのカルチャーショックを受ける体験がどれほど貴重であったかということに気づかされた。

また今回フィールドワークを行なうにあたって、現地の方々にお世話になる場面が多かった。彼らは、パリでのLGBTイベントに参加した時に交流を持った人達だ。それもただインタビューの時に共に受け答えをしてくれただけでない。現地での買い物の仕方を教えてくれたり、自分の興味のある分野について研究しているパリの学生との交流の機会を設けてくれたり、様々なサポートをしてくれた。私はフランス語が流暢な訳ではなく、彼らとのコミュニケーションもままならなかった。しかしそれでも毎日のようにメールを送ってくれ、フィールドワークを手伝ってくれた。彼らの優しさには感謝しきれないほどである。

また、フィールドワークを行い、報告書を作成するにあたって様々な面で手助けをしてくださった宮代先生、西川先生、國枝先生、そして活動するにあたり多大な支援をしてくださった支援者の方々に深く感謝申し上げます。

## Résumé

Le thème de mon travail sur le terrain est « les seniors LGBT ». Au Japon, il y a très peu de recherches concernant les problèmes des seniors LGBT on n'a pas encore trouvé de solutions.

Dans ce travail sur le terrain, j'ai interviewé un employé du Centre LGBT Paris-ÎdF, des membres de Grey PRIDE et des infirmières en maison de retraite à Paris.

L'analyse du contenu des interviews montrent que les seniors LGBT français ont de bonnes relations entre eux. Il existe en effet de nombreuses occasions où ils peuvent échanger et communiquer. Les rencontres autour d'un débat ou d'un déjeuner, par exemple, permettent de ne pas éprouver un sentiment d'isolement.

En ce qui concerne les soins à l'intention des seniors LGBT, je pense qu'il est important de les soutenir beaucoup plus moralement que physiquement. Bien que les personnes LGBT n'aient pas véritablement besoin de soins spécifiques, il est néanmoins nécessaire qu'il existe un lien humain et tendre entre elles et leur entourage. Les personnes LGBT qui résident en maison de retraite ne ressentent pas de stress grâce à un accueil efficace et pertinent.

Quant au Japon par contre, je pense que la situation des personnes LGBT est loin d'être satisfaisante. Pour les seniors LGBT et les jeunes, il faudrait multiplier les occasions de rencontre, comme, par exemple, des fêtes organisées par le LGBT centre. Il est également essentiel que le personnel infirmier des maisons de retraite comprenne la situation où se trouvent les personnes LGBT et les soutienne sans aucun préjugé.